出羽の道　川西横山通

あるいてみると2

紅花駄送の脇道

江戸時代に最上川舟運の最大の中継地であった大石田の対岸に、横山という集落があります。茅葺きの家並がいまなお残るこの集落には、かつて多数の船持や船頭・水夫が住み、大石田と共に舟運で栄えました。

この横山（山形県北村山郡大石田町）と谷地（西村山郡河北町）とを結ぶ、距離にして五里半（約二二キロ）の古道があります。江戸時代の史料では川西横山通とか、単に横山通、谷地道の名称で出てくる道です。

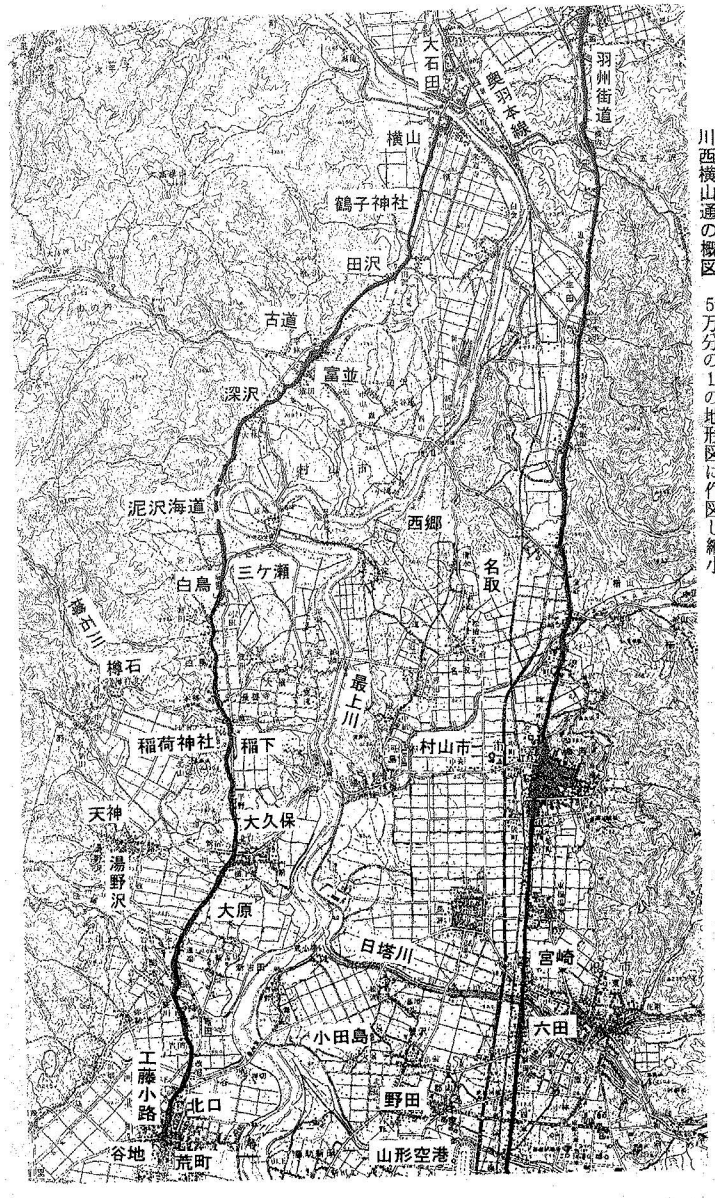
横山村から谷地北口村までの一三ケ村は谷地郷と呼ばれ、一六二二（元和八）年以降幕末まで新庄藩領でした。谷地郷を縦断する横山通は新庄藩がこの地域の支配を行う上で重要な道でした。そのため、藩は横山・富並（駒井）・白鳥・北口の各村に荷物の継立場を設置し、一七一四（正徳四）年には各継立場の間の運賃を定めていることが確認されます。しかし、幕府が指定した本街道は最上川の東側を通る羽州街道であり、川西横山通は脇道として新庄藩庁に関する物資以外の荷送りを幕府によって禁止されていたのです。

脇道である横山通が脚光を浴びたのは、江戸後期の紅花などの商人荷物の駄送一件です。一八〇四（文化元）年に谷地荒町村と工藤小路村の商人が上方へ送るために紅花荷合計六箇を横山通を通して横山村まで駄送したところ、羽州街道の宿場の者に紅花荷を差し押さえられたという事件が起き、訴訟となりました（楯岡笠原家文書）。六田・宮崎・楯岡・本飯田・土生田の羽州街道五ケ宿（第四章の図1を参照）の言い分は①羽州街道は松前・奥州・羽州の諸大名の参勤交代をはじめ「諸国諸士方往来」の重要路であり、五ケ宿は人馬継立御用の宿役を勤めている、②宿役を勤める見返りとして「商人共諸国売買交易の通り荷物」の運搬を独占的に扱い、運賃収入を得ることを認められている、③横山通は脇道であり、一般商人荷物の駄送は禁止されているにもかかわらず秘かに駄送をしているので、証拠として紅花荷を差し押さえたのである、というものでした。結局、五ケ宿側の主張が幕府により認められています。

同様の事件は既に一八〇二（享和二）年にも起きていました。また、一八〇六（文化三）年にも、山形城下町商人の伊兵衛・彦兵衛が天神湯野沢村の百姓政右衛門・武右衛門から紅花を買い集め、横山通を駄送して横山村太郎兵衛へ送り、横山河岸より船積みし川下げをしようとして差し止められた事件が起きています。

横山通による一般商人荷物の駄送が跡を絶たなかったのは、この道の方が羽州街道よりも駄送に有利であったからです。例えば、谷地産の紅花荷を谷地→野田→六田ないし宮崎、と附け出し、羽州街道を通して大石田まで駄送する幕府公認のルートは八里あります（第四章図1）。一方、前述したように谷地～横山間は五里半ですから、横山通を使った方が距離が短縮され低運賃ですむのです。さらに、羽州街道は「御用御伝馬等込み合い」商人荷物は後回しにされるので横山通を使った方が迅速に駄送できるという利点もありました。そのため、一七九〇年頃から横山通を通る商人荷物が下り荷物（紅花・漆・荏・青苧など）・上り荷物（上方仕入物・漆など）共に増加し、道橋が整備されたり、丈夫な駄牛馬が沿道村々で飼われていきました。横山通の「繁昌」の背景には、谷地郷商人たちばかりでなく、一部の山形城下町商人や大石田河岸荷宿たちが話合い、便利な流通ルートを開拓していこうとする動きがあったことも確認されます。

一九九二年一〇月上旬、横山通の現況を確認しながら歩いてみました（図を参照）。谷地北口（現在、

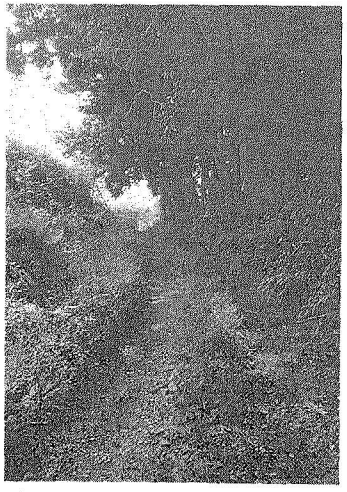


川西横山通の概図　5万分の1の地形図に作図し縮小。

谷地ひな祭りが行われる場所）の高札場のあった四辻を起点に、旧道を拡幅した現在の県道樽石河北道沿いに大久保まで歩きます。途中、茅葺きの家が点在する大原（旧宝田村）には、この地を開発した高谷家が残っており、庭にそびえる臥竜松はかつて「大原の馬つなぎ松」ともいわれ、馬方の往来が偲ばれます。

稲下の稲荷神社辺は県道の少し西側を併行して走る古道が断続的に残っています。現在は幅一間半ですが、聞き取りによればかつては幅一間（一・八二メートル）ほどだったということです。樽石川を渡り、白鳥を過ぎ、三ケ瀬の難所がある最上川の大きな曲折部に至ると、県道から西へそれていく地道の古道を確認できます。最上川の浸食作用で、現在、曲折部の外側は急な崖となっていますが、古道も浸食で失われ、崖で断絶されていました。この辺がかつて「泥沢海道（瀞沢街道）」と呼ばれた地点で、江戸時代にも浸食による山崩・崖崩が頻繁に起き、横山通随一の難所でした。一八〇五（文化二）年に白鳥村・富並村の庄屋は新庄藩の許可を得て、泥沢海道六八九間の道橋の修復を行っています。動員した人足は合計四八〇人にのぼっています。修復が困難な時は、西側の山手を迂回する新道を切り開いたことも史料から確認されます（富並村寺崎家文書）。最上川に落ちる崖の高さを目の当たりにして、当時の泥沢海道の保全にはらう人々の努力の大きさが伝わってきました。

西に迂回する道を辿って古道に戻り、深沢までの起伏の激しい道を歩くとやがて継立場だった富並



現在の川西横山通　字古道から田沢の集落へ入る地点（手前が田沢）。著者撮影。

（駒井）に出ます。富並から田沢までは古道が最も残り、現在も農道として使用されています。途中、字古道という地点では古道の一部が生い茂る草の中に埋もれていましたが、道跡を確認できました。田沢から横山までは基盤整備が行われたために古道はほとんど失われています。この辺一面は水田地帯で、稲刈りの真っ最中でした。横山通がその脇を通っていたという鶴子神社で、横山から散歩に来たという老人と鶴の親子伝説について語らいました。

木立に包まれて静寂この上ない鶴子神社であたりの稲穂の波を眺めながら休息していると、かつてこの神社の脇を活発に人馬や荷物が行き来していたとは想像し難いものがあります。近代化の中で交通体系が大きく変化し、最上川水運の衰亡と共に地域の交通も変わっていきました。川西横山通を歩いてみて、江戸時代の脇道を使った地方交通の一端を感じてみるのもいいかもしれません。

（参考）『村山市史編集資料』第四号・第一〇号
（村山市史編さん委員会、一九七六・八一）
『山形県歴史の道調査報告書・村山西部街道』
（山形県教育委員会、一九八一）